

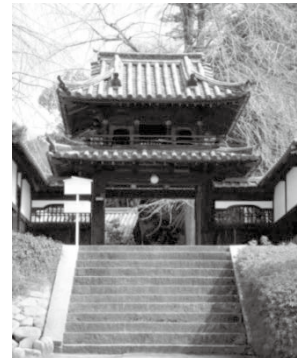
差別の思いをなすことなかれ 一遍

松山市・久万高原町

鎌倉時代中期の僧侶で時宗の開祖一遍は、延応元（1239）年、伊予の豪族、河野通広^{みちひろ}の第2子として、伊予国（愛媛県）道後温泉^{ほうごんじ}近くの宝巖寺のそばで生まれたと言われている。

10歳で母と死別した後、仏教を厚く信仰した父親の影響もあって出家した。13歳になると、伊予の国を離れて、太宰府の聖達^{ださいふ しょうたつ}上人^{しょうにん}（法然の孫弟子）のもとに赴き、浄土の教えを学びながら、12年間修行に励んだ。

弘長3（1263）年、25歳になった一遍は、父の死後郷里に帰り家督を継ぐが、文永7（1270）年、32歳で再度出家し、師の聖達上人のところへ赴く。その後、信濃（長野県）の善光寺、伊予の窪寺（松山市）、岩屋寺（久万高原町）等で修行を行った。



宝巖寺



岩屋寺

文永11（1274）年からは、四天王寺や高野山等を巡りながら修行を重ね、「南無阿弥陀仏^{なむあみだぶつ}」と記した札を人々に配り始めた。熊野本宮^{ほんぐう さんろう}に参籠するなかで、「信不信を選ばず、浄不浄をきらわず、その札くばるべし」という熊野権現^{ごんげん}のお告げを受け、「浄土の教えを信じていようが信じていまいが、その人が不浄であろうがなかろうが、だれにでも札をくばればよい」ということを悟った一遍は、男女貴賤にかかわらず念仏札を配り、布教に努めた。

一遍の生涯を描いた『一遍上人絵伝』には、一遍と共に全国を遊行するハンセン病患者と思われる人物や女性など、当時差別を受けていた人々や、社会的弱者の立場に立たされていた人々が多く描かれており、一遍の教えに彼らが共感し、救いを求めていた様子がうかがえる。そのような人々の思いを受け止め、一遍は分け隔てなく布教と救済を行った。一遍の教えをまとめた『一遍上人語録』には「専^{もつぱ}ら平等心を起こして、差別の思いをなすことなかれ」という言葉があり、平等な心の大切さを説いている。



古岩屋（久万高原町）

[参考資料]

越智通敏 『捨てひじり一遍 果てしなき旅』

大橋俊雄校注 『一遍上人語録』